

小論文

(1) 原稿用紙の使い方について

今回の答案では、問1・2・3いずれにおいても、一般的な原稿用紙の使い方を無視したのが見受けられた。小論文は、現代文などの「○○字で答えなさい」というような答案とは異なり、「文章」を作成して答えるものである。いかなる場合においても、一般的な原稿用紙の使い方を守って、「文章」として答案を作成するようにしたい。

名大の小論文の試験は、表紙に「1 ますに 1 字ずつ書きなさい (句読点もそれぞれ 1 字に数えます)」という注意書きがある。今回の名大進学模試でも、この注意書きにならっているが、この注意書きを誤解しないようにしたい。この注意書きは、一般的な原稿用紙の使い方に反するものではない。一般的な原稿用紙の使い方では、句読点や閉じかぎカッコなどの記号が行頭にきた場合は、前の行の行末の文字に添える（もしくははます目の外に出して添える）。この注意書きの「1 ますに 1 字ずつ書きなさい。」は、表記の上での原則であり、一般的な原稿用紙の使い方を無視して、句読点や閉じかぎカッコを行頭に出せというものではない。そのようにして書く「小論文」は存在しないと思ってよい。これについては、誤解のないように注意してほしい。

ただし、字数については注意が必要である。一般的な原稿用紙の使い方に従って、行末の 1 ますに文字と句読点などの記号を一緒に書き入れた場合は、「(句読点もそれぞれ 1 字に数えます)」という注意書き通り、この 1 ますで 2 字をカウントすることになる。この注意書きの大きなポイントはここにある。そのような場合には、うっかり、最終のます目までいっばいに文章を書かないように注意したい。指定字数を超えてしまうからである。行末に句読点などの記号を添えた（もしくは、はみ出させた）場合には、その句読点・記号を文字数として数えることを忘れないように注意したい。

(2) 段落設定について

問1・問2については、字数が少なく、それぞれ、単一の内容について回答する設問なので、特に段落設定は要求しない。また、複数の段落を設定していない場合には、書き始めを 1 字空けていても、そうでなくても、どちらでも可とした。

問3については、3 段落構成が望ましい。後述する「初め (序論) — なか (本論) — 終わり (結論)」というシンプルな論理構成に合致するからである。文章における段落は、だいたい 200 字程度が望ましいとされる。指定字数が 500~600 字である今回の問3では、やはり 3 段落構成が望ましいのである。

(3) 論理構成について

今回の評価では、論理性 (どのような論理によって論述しているか) を重視した。小論文における論理性は、シンプルで明快なほうがよい。論点、つまり問われていることに対する答案の骨子を、わかりやすく示すためである。シンプルな論理構成とは、「初め (序論) — なか (本論) — 終わり (結論)」のような構成である。限られた時間内で論述しなければならない試験では、オリジナルで複雑な構成など不要である。設問によっては、「賛成か反対か答えた後に、その理由を答えよ」のように、設問条件によって構

成を限定されてしまうこともあるが、可能なら、オーソドックスで単純な構成で書くほうがよい。

また、問1・問2は、問3に比べると少ない字数で説明する設問であったが、このような設問では、単純明快な文、または文章で書く必要がある。そうでないと、設問内容を正しく理解できていることがアピールできない。そのためには、単語や文節、または文の関係性が曖昧にならないように、接続語・接続助詞を正しく用いて記述する必要がある。その積み重ねがシンプルで明快な論理構成につながるのである。

今回の答案で多く見受けられた、わかりにくかった論理構造の例として、「渋滞している因果関係の論理」を挙げておきたい。それは、「だから～」「～ので」「～から」などの原因・理由を表す表現がつながりすぎている論理構造のことである。原因・理由を表す表現を短い文章の中でつなぎすぎると、因果関係が連続してしまうことになる。すると結局、その文において、何が原因・理由で、何が結果なのかが分りにくくなる。つまりは、何が言いたいのかわからない文になる。また、このような論理構造は、循環論法になりやすい。循環論法とは、原因・理由と結果が同じになってしまう、誤った論理構造である（例・寒い朝だから、温かいスープがおいしいから、やはり今朝は寒いのだ。）。そして、このような論理構造の文は、一文が長くなりがちで、主・述の関係も乱れやすくなる。小論文の文章は、なるべくシンプルな論理構造で、なるべく短い文で書き連ねていくのがよいのである。

問1・問2

どちらの設問についても、答案に骨子が感じられないものが多かった。あらかじめ骨子を検討せずに、解答欄の1マス目から書き出しているのではないかと見受けられる。ただ本文に書かれている、関連のありそうな語句を書き連ねるのではなく、まずは簡潔な骨子をまとめてから、記述するようにしよう。しっかりと骨子をまとめる時間をとったほうが、結果的に時間の節約になる。

問3

指定字数500～600字を守れていない答案は、全体の37.5%だった。指定字数を守らなければ、実際の入試であれば、1点ももらえない可能性が高い。指定字数をクリアしなければ、スタートラインに立てない。限られた時間の中で、どのように論述していくべきなのかを考えるようにしよう。

設問条件の「日常生活の中で、『悪さ加減の選択』にあたると思われる具体例」で悩んだ受験生も多かったのではないだろうか。日頃から社会問題に対して関心を持ち、さらには、問題意識をもって日常生活を送るようにして、「具体例」のストックを増やそう。